

研究報告

保育者養成における保育者としての資質・能力を育む授業展開

中島 啓子¹⁾ 工藤ゆかり²⁾

1) 北翔大学短期大学部こども学科 2) 北翔大学教育文化学部教育学科

抄 録

本学では短期大学部での2年間、教育文化学部での4年間を通して、保育者育成のために様々な授業が展開されている。複数の授業は個々単独であるのではなく、学生が進級し学びを深めていく過程によって、専門性の高まりとなり発展し、個々の科目での知識が繋がりがりや深まりを見せ、実習での実践力となる。短期大学部では、2年間の修業年限の中で保育の本質・目的、保育の対象である子ども理解、保育の内容・方法を習得し、実習を通して保育実践力を身に付ける。それには、好事例を通して学ぶ、直接体験を補うための映像活用、理論と保育実践を結びつける演習などが有効であった。教育文化学部では、4年間の修業年限を活かした繰り返しと積み重ねが有効であった。また、3年次の専門演習、4年次の卒業研究を活用し、専門性の高い保育者の養成を目指す必要もあると考える。保育者を目指す学生一人一人の学びを確実なものにしていく授業展開を実践していくことで、現在求められる様々な保育ニーズに応えられる即戦力となる保育者を養成するには有効である。しかしながら、2年間、4年間の養成校での学びだけでは不十分なところもあるので、その後の保育現場での研修を通してのスキルアップにも期待したい。

キーワード：科目の連動、多様な授業展開、養成校と保育現場の連動

I. 研究の背景

本学短期大学部こども学科及び教育文化学部教育学科幼児教育コースともに、幼稚園教諭免許状取得のための教職課程及び保育士養成課程を置き、保育者を養成している。

幼稚園教諭免許状取得のための教職課程に関しては、2016（平成28）年の教育職員免許法の改正に伴い、学校現場で必要とされる知識や技能を養成課程で獲得できるよう教職課程の内容の充実が図られ、2019（平成31）年4月から新課程での養成がスタートした。保育士養成に関しては、保育を取り巻く社会情勢の変化及び2018（平成30）年の保育所保育指針の改定を踏まえ、より実践力のある保育士の養成に向けて、2019（平成31）年4月から新課程での養成がスタートした。

幼稚園教諭免許状取得のための教職課程に注目すると、①ICTを用いた指導法、②特別支援教育の充実、③アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善、④学校と地域との連携、⑤チーム学校への対応、⑥道徳教育

の充実、⑦学校体験活動等の内容が新たに加わった。また、教科に関する科目（小学校の国語、算数、生活、音楽、図画工作、体育）を領域に関する専門的事項（幼稚園教育要領で定める健康、人間関係、環境、言葉、表現）に平成34年度までに変更することとなった。

保育士養成課程に注目すると、①乳児保育の充実、②幼児教育の実践力向上、③「養護」の視点重視、④子どもの育ちや家庭支援の充実、⑤社会的養護や障害児保育の充実、⑥保育者としての資質・専門性の向上を目指し、教科目の変更及び再編となった。

前述のことから、保育者養成には学校現場で必要とされる知識や技能を身に付けること、社会情勢の変化に対応した実践力を身に付けることが求められている。

具体的には、本学学生の実習先、卒業生の就職先の施設長の聞き取りでは、「学級担任として責任をもって保育に当たる気構え」、「一人一人の子どもと丁寧に関わる姿勢」、「子どもの育ちを保障する保育実践力」、「障害児保育の知識を基に個の実態に応じた対応力」などの姿勢や能力を身に付けることが求められている。

「保育者養成教育のレリバンス研究」(石川ら、2019)²⁾

では、保育所の施設長が考える養成教育の段階で充実させた方がよい内容として挙げられた上位5つは、「子どもの発達過程と心理（74%）」、「保育者の職務内容と責務（55%）」、「乳児（低年齢児）の保育の内容と方法（44%）」、「障害の理解と対応（44%）」、「保護者からの相談対応や家庭支援（42%）」である。

多様化する保育ニーズに対応できる即戦力となる保育者を養成することが求められている。

しかしながら、本学を卒業して保育者となった卒業生の現状としては、担任保育者となりクラス運営を任されることを重荷に感じたり、障害のある子どもへの関わりやアレルギーをもつ子どもへの対応、保護者対応などに戸惑ったりしている。職場内でのサポートや研修体制があり、オン・ザ・ジョブ・トレーニングで保育実践力を身に付けていっている。

本研究は、保育現場や社会から求められる保育者像を鑑み、保育者としての資質・能力を育むための、本学短期大学部での2年間及び本学教育文化学部での4年間の保育者養成の授業展開の在り方について検討し実践している現状を報告する。新就職課程、新保育士養成課程がスタートしたところであるので、今後も継続して検討していくこととする。

II. 授業展開

1. 保育の基礎知識を習得するための「保育原理」及び「保育内容総論」の授業展開

保育士資格取得のための必修科目であり、幼稚園教諭免許状取得のための必修科目として本学が開設している科目である「保育原理」と「保育内容総論」を、本学教育文化学部では1年次前学期に開講し、筆者工藤がいずれの科目も担当している。

「保育原理」は保育の意義及び目的、保育に関連する法令や制度、保育の思想や歴史などについて学ぶ講義科目である。一方、「保育内容総論」は「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5つの領域の保育内容を総合的に理解し、保育を構想する力を身に付ける演習科目である。

「保育内容総論」の授業展開では、演習ワークブックを活用している。授業毎に演習ワークに取り組み授業後に教員に提出する。教員がコメントや評価を付けて次回講義時に返すという学生と教員の双方向のやりとりを通しての学びに取り組んでいる。教員は学生が学んだことを把握することができ、伝えたことと伝わったことの差異を確認し、コメントや評価を付けて補助指導を行う。同時に、伝わらなかったことに対する授業改善も行うよ

うに努めている。

また、「保育原理」と「保育内容総論」を連動させながら、1年次前学期に保育の基礎的知識を確実に身に付けられるようにも努めている。連動の具体例としては、「保育の歴史の変遷」についてである。新保育士養成課程における「保育原理」の目標の一つとして「保育の思想と歴史の変遷について理解する」³⁾とある。「保育内容総論」は「子どもの発達や生活を取り巻く社会的背景及び保育の内容の歴史の変遷等を踏まえ、保育の内容の基本的な考え方を、子どもの発達に即した具体的な保育の過程につなげて理解する」³⁾とある。

そこで、まず「保育内容総論」の講義の2回目に「保育内容の歴史の変遷」について、日本の幼児教育が始まった頃の保育の方向性、制度の在り方、乳幼児期の子どもの望ましい育ちなど、一部はそのまま引き継がれていることを講義する。

その後、「保育原理」の3回目・4回目にグループワークとして「日本及び世界の保育の歴史」について調べ学習を行い、発表し合う機会を設ける。「保育内容総論」で学んだ知識を基に、自分たちで調べ交流することで保育の歴史を知り、現在の日本の保育の根幹について理解する。この理解を基盤に、その後の「保育内容総論」にて具体的な保育内容や保育方法について考えられるよう演習を行う。

2. 保育実践力を効果的に身に付ける「保育実習指導」及び「保育実習」の授業展開

教育文化学部の「保育実習」は、前述の「保育原理」と「保育内容総論」、そして「保育実習指導Ⅰ」を履修してから「保育実習」に行くことと「北翔大学保育士養成課程履修規程」で規定している。

「保育原理」で学んだ保育に関する基礎的知識、「保育内容総論」の演習を通して身に付けた保育内容や保育方法を状況に応じて選び考える保育を構想する力を基に、「保育実習指導」でさらに現場で学ぶための様々な力を身に付けていけるよう取り組んでいる。

その一つとして、3年次後学期開講の「保育実習指導Ⅰ」では「保育・子育て支援センター」と「障害者施設」を見学し、さらに「児童養護施設」の職員を招いて児童養護施設の実際について理解する機会を設けている。

「保育・子育て支援センター」の見学では、今まで様々な科目の中で反復して学んできた子どもの発達について、実際の子どもの観察したり関わったり中で実感をもって理解する。その理解を基に、「保育実習指導Ⅰ」の科目の中で、3歳未満児と3歳以上児の保育の指導案を作成し、教材研究を行い、発表を通して交流し合う機

会を設けている。

保育を構想する機会は、1年次後学期の「保育内容指導論」にて、子どもの発達について学んだ後に保育を構想して模擬保育を行う。また、2年次前学期には「保育内容健康」、「保育内容人間関係」、「保育内容環境」、「保育内容表現」、「保育内容言葉」の科目の中でも同様に取り組んでいる。

筆者工藤は、「保育内容指導論」と「保育内容人間関係」を担当しているが、1年次後学期開講の「保育内容指導論」で3歳以上児の保育を計画させるが、対象児が3歳でも4歳でも5歳でも5歳児向けの保育を計画する学生が2018年度受講学生22名中4名（14%）いた。学生の中での幼児のイメージは、幼児教育の最終年齢である5歳児である学生がいることに気づかされた。そこで、3、4、5歳児の実際の保育実践の動画を視聴することを通して、それぞれの発達について理解する機会を設けた。

その後の2年次前学期「保育内容人間関係」では、3歳児の保育内容として、「おおかみさん今何時」、「3匹のこぶたの鬼ごっこ」など、3歳児が興味をもって取り組み、その育ちを促進する保育内容を考えるようになる。学生は学びの積み重ねの中で、子どもの発達に応じた保育を計画できるようになった。

3年次後学期の「保育実習指導Ⅰ」での、3歳未満児と3歳以上児の保育の計画では、子どもの発達に応じた保育を計画するようになると共に、「ねらい」を的確に立てられるようになる。この積み重ねを基に、3年次後学期2月に保育所実習、3月に施設実習を迎える。「保育実習Ⅰ保育所」と「保育実習Ⅱ」の振り返りは以下のとおりである。

「年齢ごとの発達の理解が大切（10人）」、「事前の保育の構想と教材研究・教材準備（8人）」、「子どもの個性や特徴に応じた関わり方や保育内容を考える力（5人）」

表1 保育実習の振り返り n=29 複数回答あり

振り返り内容	件数
年齢ごとの発達の理解が大切	10
事前の保育の構想と教材研究・教材準備が必要	8
子どもの個性や特徴に応じた関わり方や保育内容を考える力	5
自分から進んで挨拶をする姿勢	5
手遊びをたくさん覚えておくことが必要	5
クラスの子ども全員と積極的に関わり信頼関係を結ぶ	5
絵本の読み聞かせができる準備が必要	5
子どもと向き合うための体調管理が必要	5
怪我への対応や安全を保障することが大切	3
一日の流れを把握したうえで動く	2
子どもが注目するような話の仕方を身に付ける	2
子どもの頑張りが望ましい行動を認める姿勢	1
子ども全体を把握できるところに位置する	1
保育者の保育の在り方や子どもへの関わり方の意図を理解	1

性や特徴に応じた関わり方や保育内容を考える（5人）」と、保育実習の目的の1つである「児童に対する理解を通じて保育の理念と実践の関係について習熟する」に関わることを学んだという振り返りが上位を占めていた。

また、「手遊びをたくさん覚えておくことが必要（5人）」、「絵本の読み聞かせができる準備が必要（5人）」、「怪我への対応や安全を保障することが大切（3人）」、「子どもが注目するような話の仕方を身に付ける（2人）」など、日々の保育実践を行うためには技術が必要であることを感じる学生もいた。

3. 「保育実習」後の各自の保育者になるための課題を克服する「保育実践演習」の授業展開

教育文化学部では、3年次後学期には「保育実習Ⅰ」で保育所と施設に10日間ずつ実習に行き、4年次前学期には「保育実習指導Ⅱ又はⅢ」を受講後「保育実習Ⅱ又はⅢ」に行く。その後、4年次後学期に「保育実践演習」を受講する。

「保育実践演習」は、保育士になるべく学びの集大成として位置づけられる科目であり、保育士としての学びの足りないところに自ら気付いて学ぶことが求められる科目である。

まず、保育実習Ⅰ及びⅡ又はⅢを通して学んだことを、各個人が振り返り、実習報告書としてまとめる。それを基に、実習報告会の準備を行う。平成30年度は実習を通して残った共通の課題についてグループで取り組む課題解決型の学習を行い、プレゼンテーションを作成して発表した。令和元年度は、それぞれが学んだことを1・2・3年生とワールドカフェ方式で共有し、ディスカッションを通して課題解決に向かう方法をとった。

いずれの方法も、学生自身が3回の実習の経験を振り返り、自己課題を明確にし、共通する課題について共有し合い課題解決に向けて取り組んだ。

4. 子育て支援「あそびのひろば」の映像を活用した授業展開

前述の「保育者養成教育のレリバンス研究²⁾では、養成段階で充実した方が良いと考える内容の第5位に「保護者からの相談対応や家庭支援42%」が挙げられた。少子高齢化が進行し、家庭や地域の子育て支援力も低下している現代社会では、保育現場における子育て支援は欠かせない。

「こども家庭支援論」（令和元年は「家庭支援論」の講義名）では、子育て家庭に対して保育士が行う相談等の支援の意義や保育士の役割について理解することが求められており、本学短期大学部では、幼稚園、保育所実

習を終えた学生を対象に開講している。

その科目の中で、地域で行っている「あそびのひろば」について取り上げた。実際の映像の視聴で、学生は遊びの環境作りの様子や、参加する未就園の様子(年齢等)や遊びに対する保育士等の子どもへの支援の様子や保護者に対する支援の様子が親子への対応の参考になった。

大学から近い文京台地区センターの会場で行われている「あそびのひろば」を子育て支援センターのご協力で見学させていただいた。学生は講義出席のため、訪問は時間的に困難であるため、筆者中島単独の観察訪問となった。その様子を伝えることとした。

この「あそびのひろば」は江別市の子育て支援センター「すくすく」が運営を行っていた。運営にあっていたのは、保育士と地域の児童委員であった。会場は、文京台地区センターの二間続きの日本間である。カーペットの敷いた二部屋20畳日本間に、テーブル1か所、遊び場3か所・読書スペースが設定してあった。生活の場を感じる部屋であり、知人の家を訪問したようなくつろげる雰囲気を感じた。来館した親子3か月～2歳児の親子を保育士等が笑顔で出迎えた。

遊びに対する関わりの中で二つのエピソードがあった。一つ目は、乳児に対する支援のエピソードである。2歳児は親の傍から離れて、用意された遊びの環境の中で一人遊びを楽しんでいた。3か月の乳児は母親に抱っこされて、周りの様子を見ていた。7か月の乳児は、座って車の玩具を握って、眺めて、口でも感覚を楽しんでいた。来年少入園を考慮している2歳児女児の親子は、楽しく会話しながらその場の環境に溶け込み、親子遊びを楽しんでいた。まだ思いを伝えきれない2歳児男児は、母親の助けを借りながら、ままごと遊びを楽しんでいた。

保育士等は、母親の傍らに座っている乳児に車の玩具を見せながら、語り掛けていた。そして、その車を握ることができると、得意げな顔を見せた。「できたね」と褒められると、満面の笑みを見せた。バチで太鼓を叩く仕草を見せては、実際にバチを持たせ、叩くまでは至らないが、何度も何度も動作を繰り返していた。母親は少し離れて、お子さんに声をかけたり、叩く動作をおおげさに見せたりして見守っていた。

同時にお母さんは、子どもの成長について、保育士に子どもの前回からの様子を聞いてもらっていた。保育士は、母親の話に共感しながら、明るい表情で話しに聞き入っていた。

一方子どもを膝に抱っこしていた母親は、太鼓を叩こうとしている子どもに応援の声をかけ、我が子の顔を覗き込んで、「トントンだね」「頑張れ、頑張れ」と一緒に相槌を打って親子で応援していた。他の子どもと思いを

共有し、親子はその場に自然と溶け込んでいた。このように「あそびのひろば」は、複数の親子が場を共有する機会を提供することで、大きな役割を果たしている。他の子どもから学ぶことが大きい。同じ空間や時間の共有の中で、自然に無理なく子育て仲間としての繋がりが生まれていくのを実感する。



写真1-① 目を合わせての語り掛け

子どもへの緩やかな語りかけを通して、目を合わせながら、距離を縮めていく。保護者は子どもの後ろ側に位置し、時折目を見て話しかける。太鼓を叩く遊びは発達段階として、握ることがまだ上手にできないので、なかなかうまくいかない。「もう少し」「上手になってきたよ」という言葉掛けに励まされ、続けようとする子どもの気持ちが伝わってくる。保護者も「こんなにできるようになるなんて」と我が子の短い時間での成長を喜んでいた。

その時間は、保育士等の子どもへの関わり方を保護者が観察して、子どもへの関わり方を学んでいた時間でもあった。親子が関わり合って学べる環境作りを、保育士が発信することの大切さを感じた。関わりを見せることで、親が子どもとの楽しい遊びのヒントを得る大切な時間となる。

学生は、このエピソードの紹介によって、保育士が遊びを通して子どもの発達を広げるという関わりについて学んでいった。無理せず、根気よく、状況に応じた遊びからの関わりを、どのように行うのかというヒントを掴んだ瞬間でもあった。保護者と同じようにこんな工夫で成長を伸ばすことができるという驚きを感じた。日常の少しずつの発達の積み重ねと、その積み重ねが、状況に応じて発揮されていく。

子どもの発達に応じた遊びの関わり方の知識をもっていることが、子どもの成長をスムーズにすることができるので、学生には乳幼児の体や運動機能の成長の知識を獲得させたい。



写真1-② 太鼓を叩く様子

二つ目は保育士の保護者への支援についてのエピソードである。遊ぶ傍らにいる保育士が子どもの日常の様子を保護者に聞く中で、日頃の子育てについての交流が始まった。保育士は保護者の話に傾聴して聞き入り、時折言葉を挿んで話題を深めていた。このように保護者にとって日常の子育てについて話しを聞いてくれる人がいてくれたり、悩みに共感したり、話せる相手がいることが、子育てにおいて母親の大きな支援の力になっていく。これから先の子どもの成長の経験がない保護者にとって、将来の成長への不安や今の成長の状態に心配を抱えていることもある。話す相手がいる環境は親にとっては、心安らぐ環境となる。



写真1-③ 保育士と親との交流

親の子育ての悩みを2019年のNHK「すくすく子育て」で「全国のパパママの子育ての悩み」の調査したデータは、下記の内容であった。

表2 「全国のパパママの子育ての悩み」
上位10位中5位まで記述

順位	パパママの子育ての悩み
1位	子どもの食事
2位	きょうだい子育て
3位	ワンオペ育児
4位	仕事と子育ての両立
5位	叱り方

このデータから、大学で実践的に対応を学べるのは、子どもの栄養やワンオペ育児への対応、子どものしつけ等である。このことから講義で学んだ専門性が活かされる内容があることで学生の自信に繋がると考える。

他の講義でも「子育て支援」を取り上げているが、実際の支援の様子は、学生は観察した経験がない。幼稚園や保育所で行っている企画については、実習中には意識していなかったために気付かなかったという実態があった。学生は保育現場（実習中）で「子育て支援」を意識して見ているかどうかで、言葉と実際の様子が結びついていない現実が浮かび上がった。

実習の際に「未就園児に対する支援」としての幼稚園・保育所の企画についても、観察する項目を取り入れ、知ることから進めていく内容を取り入れるとさらに理解しやすいと考える。

教育文化学部では、履修者が20～30人ということで、「保育実習指導Ⅰ」の科目の中で、「保育・子育て支援センター」を見学に行く機会を設けている。子育て支援の実際を観察することにより、具体的な支援の在り方を理解し、利用者の多さから改めて子育て支援の必要性を再確認した。

親同士が交流している間は、子どもは安心して、一人遊びを楽しんでいた。親の安心感を子どもが自然と感じ取っていくかのように、子どもも玩具に慣れ、楽しく遊ぶ時間を過ごしていた。保護者の心の安定が、子どもの安心感に繋がり、育児の安定に繋がっていく。

2歳児の子どもは、子ども同士で関わり合って遊ぶには、もう少し成長を待たなければならない。そこで、親が傍らで見守り、子どもと子どもの行動や気持ちの橋渡しになっていく必要がある。

「あそびのひろば」を訪れる親子は、家庭の場から離れ交流を求めてやって来る。子育てを支援していく上で、親子にとって安心感のある場所を、提供することが必要であると感じる。不安をもって参加する親子の不安を安心感へ変えていくのが、運営する保育士等の心遣いであることを実感した。また親子が孤立せず他の親子との関わりを作る環境を生み出し、子育て仲間を繋げる働きも「あそびのひろば」には見られた。

5. 学生の身近な地域での「子育て支援施策」の実態を調べる授業展開

短期大学部では、将来就職する地域、住む地域、故郷で行われている「子育て支援の施策」についての企画や施策について調べる内容に取り組みさせた。筆者中島が担当する「こども家庭支援論」（令和元年は「家庭支援論」の講義名）で、学生が大学で講義中の時期であるため実際に現地で行うことは困難であり、調査手段は市町

村のHPからの情報が主となった。自宅通学生は、市町村で発行する広報誌も活用することができた。多くの学生は調べる内容は初めて知ったものであった。市町村が子育て支援施策に力を入れている事を実感し、施策が多岐に渡ることによって驚きをもった。就職活動が迫る時期に課題を設定したことで、学生が子育て支援策について意識を高めたと考える。

調べる手段として市町村のHPからの情報が多いに役立ったが、今までに自ら調査する取り組みを設定していなかった。生まれ育った地域がどのような子育て支援策を行っているのか自ら問題意識を持っていないければ、視野が広がりにくい。学びを広げていくためには、調査する機会を設定することが大事である。実態調査に対し意欲的に取り組む学生が多く、子育て支援施策は学生が予想していたより多いことに驚きを持っていた。

感想を取り上げてみると、以下のようなものである。

表3 子育て支援の施策を調べての振り返り

特色ある市町村の企画では、花火や米、食器など様々な独特なキーワードが出てきて驚いた。未就園児の保護者がリフレッシュできる環境を作り、心身の不安を溜めない様にするのが大切である。
市主催のコンサートに出演した時、保護者もニコニコと笑って楽しい雰囲気が流れている素敵な空間と感じた。こういう場所がもっと認知されていけばと思う。
自分も人的社会資源になり、地域に貢献できる人になりたい。
地域で丸丸となって子育てを支えていくことがとても重要である。
地域によって支援が違うことを改めて理解した。
親のリフレッシュは大切である。夫婦だけではなく、地域で助け合うことができそうである。自分が親になったら利用したい。

子育て支援事業の交流を行うと、他の市町村との違いがあることに驚きを感じていた。例をあげると市町村の特長ある支援は誕生を祝って、記念品や祝い金、イベントでのお祝いや、紙おむつのゴミ袋の無料化や紙おむつ代の助成であった。

調べる内容の中で、児童手当について取り上げた内容があった。児童手当等については、全国一律に行われているが、通院医療費等の助成は地域によって対象年齢も様々であった。国が一律に支援している公的扶助と市町村独自の施策を混同した内容も見られた。

調査に当たる前に国の施策を学び、児童手当等の公的扶助について触れておく必要を感じた。交流する機会がないので、市町村独自の施策との混同が生じることが、調査し終わった後に知ることとなり、地域の独自の施策に勘違いが起こっていた。今後は予備知識として提示すべき内容を区別しておかなければならない。

課題に取り組む際の改善に対しては、事前の資料や全国的な国の施策を振り返る必要がある。振り返ったうえ

で市町村の工夫されている内容を浮かび上がらせることである。HP等の文字情報は、実感が伴わず、事前の学びを深めるためには、資料の取り上げ方や調べる観点の工夫が必要となる。

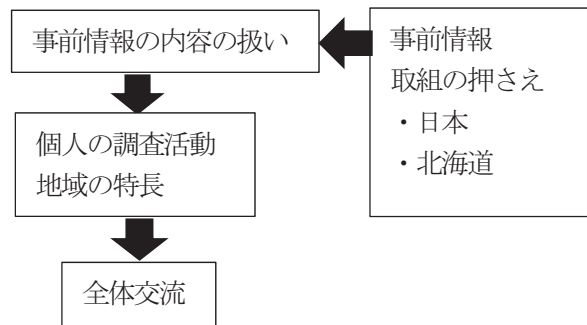


図1 子育て支援に関する授業展開の方法

授業展開としては、全体交流を計画していなかったが、国・市町村の施策の混同があり、誇れる市町村施策の内容も出てきたため、後半に全体交流を行うとより内容が深まると感じた。保育者としての今後の視野を広げるためには、地域や施策を知ることが不可欠となる。その土台作りのために課題の取り組みは、利点をもつと考える。そのためには、講義時間の内容を精選し、再構成していかなければならない。

6. 親・子・地域の繋がりを考えた企画

短期大学部の保育実習を終えた2年生を対象に行う「保育実践演習」で、「子育て企画」を実際に考え、広報活動に発展させた課題を行ってきた。今年度は子育て支援にとって、親子同士の繋がりと地域との繋がりの大切さを強調した。新しい視点として、「地域」も取り上げられた。地域の商店街を社会資源とした子どもの「おつかい」をテーマにしたものであった。テレビ番組の影響を受けている要素もあるが、地域の商店街の協力を得て、企画する内容であった。地域の見守り活動に支えられた企画である。以前「理想的な地域とはどんな地域であるのか」の問いに対して学生の多くは、子育て家族にとって地域の安全性を重視した回答が多かった。地域において、子どもの安全な屋外遊びが確保されて、「子育てにやさしい街」となることを願う学生が多かった。子育てする環境が地域に整えられることを、望んでいる。

学生は知識や言葉としては、子育てサロン企画は知っていても実際の現場は見学したことがないため、事前学習としての環境づくりの大切さを考えた場の設定が必要になってくる。学生は実際にイベントのボランティア活動の経験を持つ学生もいたが、子育てサロンに参加した経験が少ないので、具体的に考えることは難しかった。

企画の主な例は、運動系、制作系、食育・料理系、遊

び系、園外活動であった。広報活動としてのちらし作りでは、ちらしに記載する情報内容も思案するところであった。必要な情報の吟味も行い、作りながら日時や場所はもちろん、地図や駐車場、持ち物、問い合わせ先等の情報が書き加えられていった。制作しながら、お互いに交流して内容を加えていった。制作方法の手段として、手書きは圧倒的に多かったが、PC活用を選択肢に加えると、PC制作にも取り組んだ。他の講義でPC使用が取り入れられた影響もある。これから求められる保育者の資質能力にICT技術がある。講義の中で、ICTに触れる機会を意図的に増やしていく必要もある。

乳幼児の午睡の見守りや保護者の送り迎えにもICTの導入が行われ、おたより作成にもPC技術が役に立つ。



図2 子育てサロンのちらし作り

7. 母親の心情と寄り添う保育者意識の連動

学生にとっては、核家族の中での育児に、孤独を感じる母親の心情を理解することはなかなか困難であった。漠然と想像することはできるが、母親の孤独さや育児に悩む母親の心情まではなかなか思いが寄せられない。昨年も視聴した孤独な育児の実態を扱ったドキュメンタリーを再度、授業に取り入れた。昨年はダイジェスト的に補足的な取り扱いであったが、今年は孤独な育児ママの実態を、前置きなしに視聴した。都会の中で、子育て企画に参加し、子育てママと繋がりを求める母親や夫に対するやり場のない不満を持つ母親、イヤイヤ期の子どもに対して葛藤する母親、子育てを一生懸命しようとしても子どもへのイライラが募り、育児ノイローゼ気味な母親等様々な実態が紹介された。その原因の一因を科学的に分析しながら、その行動や悩みを科学的なメカニズムで解き明かし、その行動や心情には理由があることを、紹介されていく内容である。

子育てする母親の心情に、大きな理解を示した。保育者として母親の心情面を理解することは、不可欠であ

る。子育て経験がないので、育児不安についてよく分からないと理由づける学生も多い。それであれば、知識を広げることから始めることが、母親の心情面を理解することに繋がる。視聴する立ち位置は、保育士としての提えが多かった。保育士としての立場から考えた学生の感想は下記のものであった。

表4 ドキュメンタリーを視聴した感想①

母親になる前の人に物凄く見て欲しいと思った。養育、保育する時の知識になった。
子育てでママは不安や孤独を感じていることが分かった。近所付き合いが弱い現代では、ママ友の存在や理解者、協力者が大切である。だから保育者は身近な理解者になって、一緒に育てていくことができるので、親身になって関わってきたい。
保育士になった時に保護者に支援できるように頑張っていきたい。
一人で苦しまないで、皆で支え合って子育てをしていくことを、保護者に伝えていける人間になりたいと考えた。
寄り添う気持ちを忘れずに、保護者に接することができるようにしたい。
保育者は母親にとって心の拠り所であり、大切な存在であり、なくてはならない存在であると改めて思った。
保育士の仕事の大変さや母親の大変さを、改めて感じた。
実際に研究したデータや体のつくりについて理解することは、母親を安心させるためにも、保育者の専門性を高めるためにも大切である。
実習で子どもたちにたくさん関わったので、自分は「母性」は一般の学生よりも多く得ているのかと思うことができた。
就職した時、母親の気持ちになって対応出来たと思った。
話をするだけでも救われるということが分かり、勉強してきたことが役に立つと思った。
自分の中でも役立てることができると思うので、これから学びを今後活かせるようにしていきたい。

その他の感想の中では、子育てを社会の現状から考える学生もいた。

表5 ドキュメンタリーを視聴した感想②

子育てに対するイメージがまたガラリと変わった。
不安を感じるのは、仕方のない事、社会の変化に人間も社会自体も対応できていないこと、それでも人間は人間を育てていくことを不思議に思いつつ母親になる憧れが消えない事が人間の魅力だと感じた。
母親の状況を社会全体で認識し考えていかなければならないと思った。
ママ友やSNSも悪くないと思った。ストレスや不安が軽減されるなら。
地域の子育ての支援の重要性を改めて感じた。核家族化が進んでも、近所に助けてくれる人が一人でもいたら、精神的にも身体的にも母親は楽になれる。

この感想から、自分が保育者としての立ち位置から、問題点を考え、視聴していることが伝わった。さらに、保育者としての職業上の役割や姿勢についても考えを深めている。母親としての経験に不安を持つ学生が多いが、保護者に寄り添おうとする姿勢を感じる。多くの講義を受けて育ってきた姿勢であると考えられる。

子育てに悩む母親が社会から孤立せずに子育てを前向きに行い、自信をもっていけるように支えることが保育

士の仕事の一つであるという前提のもとに、授業を進めていった。保育者としての子どもとの楽しい内容は理解できても、社会状況になかなか目を向けられていない学生の現状があった。子どもを取り巻く社会状況や政治の動きについては、知らないことも多く、ニュース等にもあまり興味を持たない。社会の動きを講義の中で取り入れながら、社会情勢を意識させる必要性を感じる。

8. 学生の意識調査

これからの講義の改善のために、短期大学部では学生の考えをリサーチした。2年生90名である。

Q1. 子育てに悩む母親の悩みが、理解できましたか。

子育ての悩みへの理解

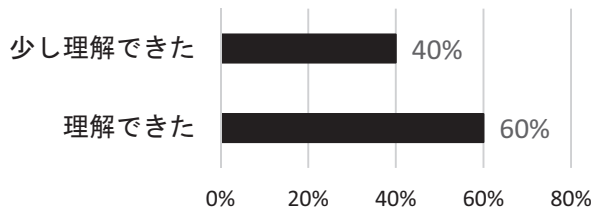


図3-① 子育ての悩みについての理解

子育てに悩む母親の理解が「できた60%」、「少しできた40%」であり、理解できない学生は0%であった。この結果から親の子育ての悩みについての理解は、授業を通して深められたと考える。

Q2. 養成校で学んだどんな内容が、子育て支援に活かせると思いますか。

記述された内容は下記の通りであった。

表6 養成校で学んだ子育て支援に活かせる内容

子どもの発達段階の知識、発達過程の目安、保護者の不安な気持ちの知識、演習した経験を活かせる。
保護者に共感する気持ち、保護者とのコミュニケーションの取り方、傾聴、相談援助に活かせる。
地域の子育て支援事業や支援サービスの理解をしたので、情報を伝えることができる。
母親の悩みについて、原因の理解ができ相手の立場に立って考えることができる。
交流の場をつくる、親子のできる遊びの提案ができる。
子どもの安全を守ることができる。
関連機関の役割を知っていることで、保護者の力になることができる。

学ぶ前と学んだ後の意識の違いを質問すると

Q3. 講義を通して、自分の子育てに関する意識に変化がありましたか

結果は下記のようなものであった。

学ぶ前後の意識の変化

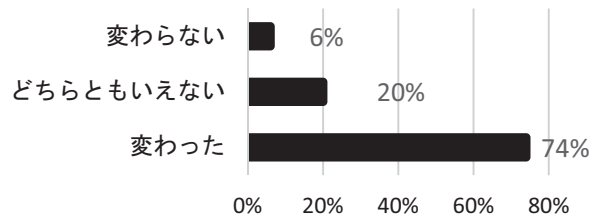


図3-② 学ぶ前後の意識の変化

意識が変わったという学生は74%であった。どちらとも言えないは20%であった。変わらない6%は、以前から意識を持っていたので、変わらなかったのか、学んだことによっても意識に変化がなかったのかはこの調査では捉えることはできなかった。今後は有効な内容はどのような内容であったのかを詳しく見ながら、改善を図っていかなければならない。

地域の子育て支援事業への理解

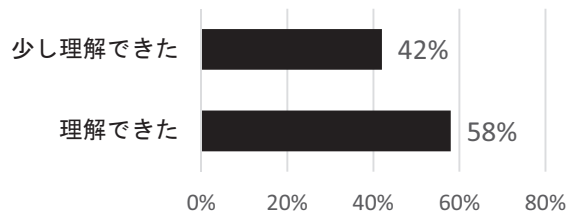


図3-③ 地域の子育て支援事業への理解

この結果を見ると、理解に繋がらなかったという回答は見られなかった。少し理解に繋がったという回答の中には、深い内容の回答を求めなかったため、理解を深められなかった内容について知ることができなかった。図3-①と図3-③の結果から子育ての悩みについて理解を示した割合と支援事業への理解の割合は、近似な値を示しているため、悩みを理解した上で子育て支援事業を理解することができたと考える。

教育文化学部では、旧保育士養成課程の科目である「家庭支援論」、「相談援助」、「保育相談援助」にて子育て支援について学び、保育実習で子育て支援の現場を観察または体験することでさらに研究を深めたいと考える学生がいた。その学生2名は、4年次に年間を通して取り組む卒業研究として「戦後の子育てに関する意識の変遷と現在の子育て支援の実際」、「少子化社会における子育て支援の意義と価値」について取り組んだ。子育て支援に関する文献研究にて変遷について確認し、子育て支援の現場を視察し、利用者と保育者にインタビューをして、子育て支援の意義や価値を確認した。取り組んだ学

生は、「子育て支援が充実しているのに、少子化に歯止めがかからないことに疑問を感じていたが、子どもを産み育てることに至るまでに原因があることに気づいた」、「子育てしづらい環境になっていることを実感し、自分が保育者になった際には子育て支援に積極的に取り組みたいと考える」などと振り返った。

教育文化学部の4年間の保育者養成の特徴ともいえる卒業研究の科目にて、特定の事柄に高い専門性をもつ保育者を養成することができると考える。

9. 子どもの育ちを支える保育と理論との連動

子どもの成長や発達を支える事象、事物として、「児童文化財」について取り上げる。数多くある「児童文化財」の中で、演習として絵本、紙芝居を取り上げて、実際に学生同士で読み聞かせや実演の実践を短期大学部でも教育文化学部でも行った。絵本と紙芝居を実際に学生同士で読み合い聞き合う中で、この二つの児童文化財の違いに気づいていった。



写真 2-① 絵本の読み聞かせ

短期大学部では、紙芝居の実践では、昔話での方言、言い回しが難しく、下読みの練習の必要感を感じた。引き抜き方では3分の1や、半分の表示、ゆっくり引き抜く等の指示に沿って行うことに戸惑いや、引き抜いた紙を舞台にもどすことの難しさを感じた。また演じるという観点で考えると、登場人物に応じた何通りの声色や擬音の表現にも苦戦していた。実践を通して初めて、下読みの大切さに気付いていった。読み手、演じ手の立ち位置も実践しながら、両者の違いを理解していった。このように実践を通して、より深く理解していくことが実証された。絵本の読み聞かせや紙芝居の「児童文化財」を通して、子どもとの心情の交流を願う意識も生まれてくる。

「保育内容言葉」では乳幼児における言葉の発達を理解するために事例⁴⁾を通して、学ぶ機会を設けた。2歳

3か月の女兒が、保育者とボール投げ遊びを通して、保育者の言葉を真似ながら言葉を獲得する事例である。この事例を通して、大人の言葉の模倣や言葉の繰り返しが言葉の獲得に繋がっていくことを学んだ。言葉は大人の言葉の模倣の繰り返しで獲得していく。松村康平は、「児童学事典」の中で言葉の獲得は一定して漸増するというよりは、しゃべらなくとも溜め込まれていて、急に増えるなどの緩急がある。」⁵⁾と述べている。この事例から言葉の育ちを支える保育の実際を知り、保育者の役割を学んだ。子どもと保育者の関わりの事例を学ぶことによって、子どもの心情を理解し、支える保育者の実践に感動し、気が付かなかった支援に気付くことができた。

教育文化学部では、「保育実践演習」の科目の中で、保育実習を通して残る課題として、「絵本の選定の在り方」が挙げられた。絵本の読み聞かせはどの保育現場でもほぼ毎日実践されており、自分たちが保育者になった際にも、年齢発達や状況に応じた絵本を選定し、読み聞かせを行うことを意識した。そこで、それぞれが保育実習で読み聞かせを行った絵本を取り上げ、選定の理由を交流して、各年齢毎に分類してお勧めの絵本紹介を作成した。以下の写真のとおりである。

これを、「保育実習報告会」の時に掲示して、1~3年生に紹介した。

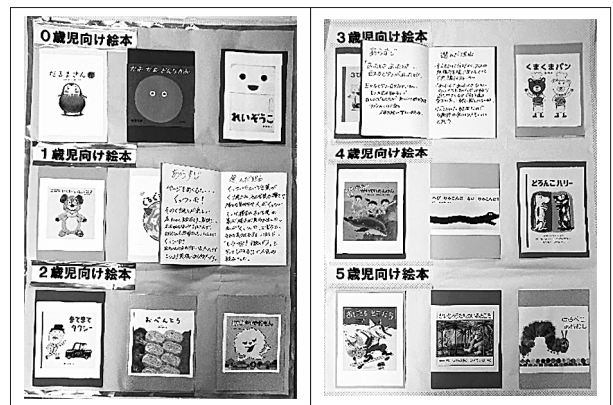


写真 2-② 各年齢毎のお勧め絵本

また、絵本について研究を深めたいと考える学生もあり、卒業研究として「保育現場における絵本の価値と活用の実際」というテーマで、絵本の種類について文献研究を行い、保育現場に向いて各園の絵本の環境、保育者の読み聞かせの実際などについて研究に取り組んだ。研究に取り組んだ学生は、「色々な園の絵本棚や絵本コーナーを見て、それぞれに意図があることを感じた。多くの読み聞かせ場面を観察させてもらい、保育者になった際に実践しようと思った。絵本については自信をもって保育実践できるので、研究に取り組んで良かった。」と振り返った。

Ⅲ. まとめと今後の課題

短期大学部での授業の取組の中で、2年間という短期間の中で、机上の学びから実践力への移行のために必要なことを洗い出していく必要があった。

体験できない事については、事例を通して学ぶ方法が有効であった。実習日誌を読むと、保育者の子どもに対する接し方を見ている、その行動の意図を見とれないことをも多い。事例を取り上げて、保育者の行動の意図や言葉かけの大事さを見取る能力を育むことに繋がっていった。子どもの気持ちを細やかに読み取り、応答的に対応していく保育を感じてもらいたい。学生にとっては実習では難しかったむやみに手や口を出さない見守る姿勢も事例を通して学ぶことができた。学生に実際に体験できない様子を見て、映像を通して掴んだり、事例を通して分かったりしていくことがある。そこで補助教材・資料としての映像等の準備することが能力を高める効果が期待できる。災害で、幼稚園での観察実習が中止となったことがあった。その時は幼稚園の様子をイメージするために一日の様子を写した映像を1年生に視聴させ、子どもの動と静の活動の様子や先生の援助の様子を何とかイメージすることができた。

学生への資料・情報提供の厳選も授業展開には必要であった。学生の知識や情報量を考え、授業内容に沿う資料を効果的に活用する必要がある。学生が知っている当然という前提ではなく、思考する際には、どの程度の情報量を持っているのかを探り、押さえていない情報については、こちらから情報提供する必要があった。実際の授業の中でも内容は当然知っているであろうとやり過ぎた事から、調べる項目にずれを生じた学生もいた。また学生は身近なインターネットで検索を進めるが、絞り切れずに内容が広がっていくことがあった。

「保育内容言葉」の授業では、学生の意識の変化の確認をしながら、授業をすすめることを大事にした。絵本の選定では、自分が薦める本の紹介を行ったが、流行の本や有名な本の他に、幼い時に読んでもらった本や自分が感動した本を選定していた。学生同士が絵本を読み合うことを通して、実践技術の向上に繋がる時間が広がった。短期大学部では、資質・能力を高めるために2年間で、詰込み的な内容が多く、応用する時間の確保を工夫していかなければならない。

教育文化学部の授業展開では、1年次の「保育原理」、「保育内容総論」、「保育内容指導」等の保育の本

質・目的理解などから、2年次の領域及び保育内容の指導法に関する学び、そして3・4年次の教育実習・保育実習を通しての現場での保育実践力を養うという科目間の連携と積み重ねの中で保育者としての資質・能力が養われていることが確認できた。特に、保育対象である子どもの発達の理解は、一般的な発達を様々な科目で学び、現場での観察及び保育実践を通して理解するという積み重ねの中で徐々に的確に理解していくことが分かった。科目間の内容の重なりは、保育者になるために必要な重要な学びである。

教育文化学部は、4年間の期間を有効に活用し、3年次の専門演習や4年次の卒業研究等の取り組みを通して、自分の得意な分野をもったより専門性の高い保育者を養成していくことが、保育現場や社会から求められる保育者養成に応えることになると考える。

Ⅳ. 謝 辞

本稿執筆にあたり、ご協力をいただきました文京台子育てサロンの保育士の皆様に見学にご協力いただき感謝申し上げます。

Ⅴ. 引用文献

- 1) 内閣府子ども・子育て本部, 認定こども園に関する状況について(平成31年4月現在), 情報取得年月日: 令和2年4月10日
https://www8.cao.go.jp/shoushi/kodomoen/pdf/kodomoen_jokyo.pdf
- 2) 石川昭義・森俊之・伊東世光, 保育者養成教育のレリバンス研究, 2019, 日本保育学会第72回大会発表
- 3) 厚生労働省, 2018, 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について, p1-2, p27-28
- 4) 榎沢良彦・入江礼子, 保育内容言葉, 建帛社, 2018, p. 55
- 5) 松村康平・浅見千鶴子, 児童学事典, 光成館1980, p171

Ⅵ. 写真の取り扱い

本論文の掲載の写真は、子育て支援の主催者並びに子育て支援サロンの利用保護者、学生の了解を得た上で掲載したものである。

Class Development that Fosters the Qualities and Abilities of a Childcare Worker in the Training of Childcare Workers

Abstract

Throughout the two years at the junior college and four years at the Faculty of Education and Culture, various classes have been developed to nurture childcare workers. Multiple lessons are not individual, but rather develop and develop expertise through the process of progressing and deepening learning by students, showing knowledge and expanding and deepening knowledge in individual subjects, and practicing in practical training Become power.

In the junior college, students will learn the essence and purpose of childcare, the understanding of children targeted for childcare, the content and method of childcare, and acquire the practical skills of childcare through practical training during the two-year training period. For that purpose, it was effective to pick up good examples and learn through them, to utilize images to supplement the direct experience, and to practice the theory and childcare practice. In the Faculty of Education and Culture, it was effective to link subjects so that they could be repeated and accumulated by taking advantage of the four-year training period. It is also necessary to aim for the training of highly specialized childcare workers by utilizing the specialized exercises in the third year and the graduation research at 4th year. By developing classes that ensure the learning of each and every student who aims to become a childcare worker, it is effective in developing a childcare worker who can quickly respond to the various childcare needs currently required. However, there are some areas where it is not enough to study at a training school for two or four years, so I hope that you will improve your skills through subsequent training at childcare sites.

Key words : Interlocking of subjects, Diverse class development, Interlocking training schools and childcare sites